
NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.3

国立国会図書館
月報



開館 70 周年記念展示講演会 ロバート キャンベル、井上 章一

新連載 あの人の蔵書 クラップ・コレクション

本の森を歩く 地図から消えた庭

695 号 2019 年 3 月

国立

国会

図書館

月報

NO. 695
March 2019

CONTENTS

1 優美な黒蝶、謎のサソリ

— 『昆蟲圖譜』 から —

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

開館70周年記念展示講演会

4 一冊の中には小宇宙

〜江戸時代のスクラップブックを開く〜 ロバートキャンベル

8 本でまなぶこと 街が教えてくれること 井上章一

13 あの人蔵書 第1回 クラップ・コレクション

18 クラップさんの思い出

— レベッカ・ロウさんインタビュー —

20 本の森を歩く 第20回

地図から消えた庭 小沢文庫から

28 館内スコープ

たくさんさんの声を聞きながら

29 本屋にない本

『ガチャガチャ大研究』

30 NDL Topics



表紙：
「淡路・水仙郷」
『兵庫百景』川西英 版画
神戸新聞社 1964 35cm
<請求記号 733-Ka885h>

優美な黒蝶、謎のサソリ

—『昆蟲圖譜』から—

小針 泰介



『昆蟲圖譜』

小塩五郎 寫生 [18--] 2冊; 25cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2607788>

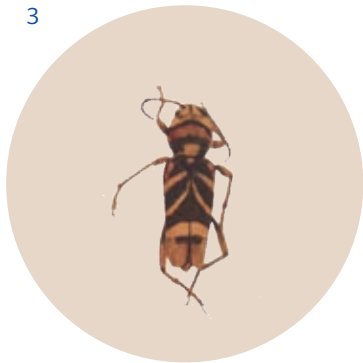
上の優美な黒蝶は、『昆蟲圖譜』に描かれる「ヲハクロテウ」である。お歯黒のように黒い羽には赤い模様があるが、羽の黒い部分にも、幾筋もの脈が通っている。著者の小塩五郎は、この脈を黒の濃淡で巧みに描き出しているほか、触角の先の丸みや腹部のふさふさとした質感を、繊細な筆致で表現している。

小塩は尾張藩士の家に生まれ、幕末から明治時代にかけて活躍した本草学者であり、『昆蟲圖譜』は、小塩が記した昆虫の写生図を、小塩と交流があった植物学者の伊藤篤太郎がまとめたものである。小塩は、尾張生まれの博物学者である伊藤圭介と親交があった。その縁で、小塩は自分が長年にわたって描いてきた写生図を、圭介の孫の篤太郎に託し、篤太郎の手によって『昆蟲圖譜』がまとめられた。『昆蟲圖譜』は現在、当館所蔵の伊藤文庫に収められている。

篤太郎による『昆蟲圖譜』の序文では、小塩は「性淡泊無欲にして、動植二物の生態と、形態とを観察することを好み、殊に昆虫と、鳥とを研究すること頗る深く、奇種異品を得る毎に、必ず先づ之を写生することを樂事とし、為めに寢食を忘るるに至る」と評されている。寢食を忘れるほど昆虫や



1



3

(参考) トラフカミキリ
加藤正世 著『分類原色日本昆虫図鑑』第九輯 厚生閣 1933 <請求記号 486-Ka641b>より



2

鳥の写生を好んだ小塩は、この『昆蟲圖譜』のほか、蝶を描いた『蝶譜』、鳥や魚、モグラ等の小動物を描いた『動物圖譜』等を記している。

ところで、この『昆蟲圖譜』を見ていると意外なことがわかる。例えば「サソリ」である(1)。この「サソリ」は、現代の人々が思い浮かべるような、ハサミを持ち、尻尾の先に毒針のあるサソリとは、似ても似つかない姿をしている。この「サソリ」は一体何者だろうか。

ハサミを持ち、尻尾の先に針のあるサソリは、日本では南西諸島や小笠原諸島にしか生息していないため、古くには、サソリとはジガバチを指したと言われている。しかし、『昆蟲圖譜』ではジガバチは別に描

かれており(2)、著者の小塩はこの「サソリ」とジガバチを区別している。したがって、この「サソリ」はジガバチではない。それでは、この「サソリ」の正体は何なのか。その謎を解く鍵は、この「サソリ」の図の横に記されている「桑木の天牛」にある。天牛とは現在のカミキリムシのことであり、「桑木の天牛」とは、桑の木にいるカミキリムシを意味すると考えられる。桑の木にいる黄色と黒のカミキリムシ——それはトラフカミキリである(3)。トラフカミキリは桑畑等に多く見られ、スズメバチに良く似た姿をしている。この「サソリ」の黄色と黒の斜めの縞模様や胸部の薄い赤色は、トラフカミキリの特徴と一致している。

『昆蟲圖譜』には、この他にも様々な昆虫が描かれている。「共に岐阜の産なり」と付記される2匹のクワガタは「ヲニムシ」と記されている(4)。「ヲニムシ」は地域によってカブトムシやクワガタ、コガネムシを指すと言われているが、『昆蟲圖譜』ではカブトムシ(5)は「カブトムシ」、コガネムシ(6)は「コガネムシ」と記されており、クワガタが「ヲニムシ」と呼ばれている。さらに、同じ「ヲニムシ」でも上と下では大あごの形や大きさが異なり、こ

5



4



6



注 引用に際し、カタカナを平仮名に、漢字を平易なものに直しました。

○参考文献

- 鈴木知之 著『新カミキリムシハンドブック』文一総合出版 2017.3<請求記号 RA7-L39>
- 阿部光典 著、神奈川昆虫談話会 編『昆虫名方言事典』サイエンティスト社 2013.12<請求記号 RA2-L16>
- 『日本国語大辞典 第2版』第2巻 小学館 2001.2<請求記号 KF3-G103>
- 『日本国語大辞典 第2版』第6巻 小学館 2001.6<請求記号 KF3-G103>
- 大林延夫 [ほか] 編『日本産カミキリムシ検索図説』東海大学出版会 1992.3<請求記号 RA7-E10>
- 日本鞘翅目学会 編『日本産カミキリ大図鑑』講談社 1984.11<請求記号 RA7-26>
- 土井久作「採集家小鹽五郎翁のこと」『採集と飼育』9巻11号 日本科学協会 1947.11<請求記号 Z18-48>
- 名古屋市 編『名古屋市史』人物編 第2 川瀬書店 昭和9
- <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1145366>

の2匹の違いが描き分けられている。
 昆虫の呼び名は時代や地域によって大きく異なり、『昆蟲圖譜』から昆虫の呼び名の多様性を垣間見ることができる。『昆蟲圖譜』の昆虫はいずれも細部まで詳細に描かれており、小塩の鋭い観察眼と卓越した写生の技量、昆虫を描く欲びとあくなき情熱が感じられる。



一冊の中には小宇宙

江戸時代のスクラップブックを開く

ロバートキャンベル

2018年10月27日(土)に東京本館の新館講堂で行われた講演会の様子をダイジェストでお伝えします。
(講演筆記・文責 本誌編集担当)

国立国会図書館には20代の頃から、それこそ、この新館がない時代から通って、江戸から明治初期の資料をあれこれ拝見していました。28〜29歳頃、はじめて発表した論文^(注)に使ったのが国立国会図書館所蔵の『焦後鶏肋冊』(図A-①)というスクラップブックです。虫喰いで分かりづらいのですが、表紙に「第二集」と書かれています。

スクラップブックは、個々の文芸作品とは別の文化的な意味があります。日本では張込帖^{はりこみぢょう}、張交帖^{はりまぜぢょう}といいますが、本来は流れて消えてなくなってしまう、使い捨てにされるもの。それが残されているのが日本の書物文化の面白いところです。

このスクラップブックを作ったのは、

ロバート キャンベル氏

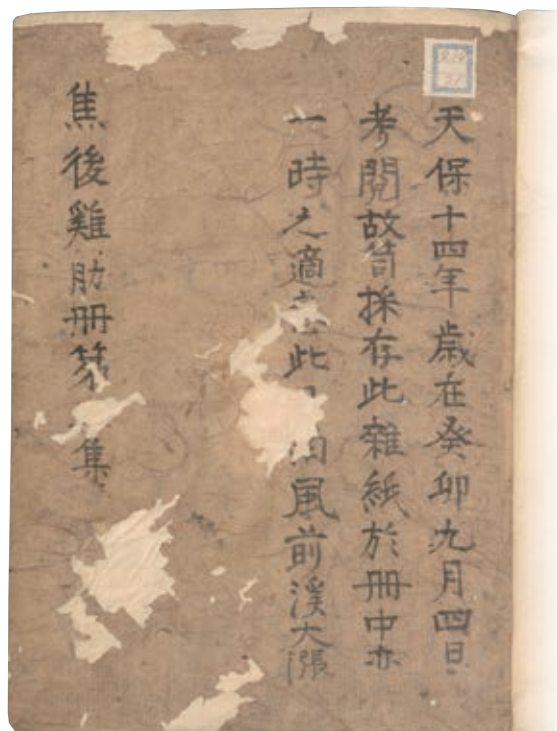
国文学研究資料館長。文学博士。専門は近世・近代日本文学。

九州大学文学部専任講師、国文学研究資料館助教授、東京大学大学院総合文化研究科助教授、同研究科教授を経て、2017年4月から現職。

編著に『ロバート キャンベルの小説家神髄』(NHK出版)、『J'ブンガク』(東京大学出版会)、『読むことの力』(講談社)など多数。

(注)「天保期前後の書画会」『近世文芸』日本近世文学会 編(通号 47) 1987年11月
<請求記号 Z13-907>

図A-①
『焦後鶏肋冊』国立国会図書館所蔵
<請求記号 234-28>
※閲覧はモノクロのマイクロ資料になります。



東條琴台（1795・1878）という儒学者です。博識で本草学にも明るい。でも、素行が悪いんです。文化14（1817）年頃、今の岐阜県、岩村藩の平尾という家に婿養子に入ると、領内行政に関わらなくちゃいけなくなって、結局、妻と子どもをおいて夜逃げをします。じつは実践女子大学の創立者の下田歌子（1854・1936）がこの人の孫にあたります。彼は江戸にもどり、文壇の中で活躍します。特に、当時はやっていた書画会を中心人物、フィクサーでした。書画会というのは、大広間に人々が集まって、書家や画家がみんなの前で詩や絵などを即座に制作するイベントです。全国に広がっていました（図A・②）。毎週のようにどこか、料理屋や寺院を借りて、いわばゲリラ的に開催されます。1000円ぐらいの席料を払えば、誰でも、男女、身分を問わず参加できました。

「焦後」というのは火事が起きたあと、つまり焼け残ったという意味です。琴台は谷中の近くに暮らしていましたが、天保5（1834）年2月に一帯が燃えてしまふ火事があり、蔵書が全部燃えてなくなっしてしまいました。無事逃れて、引越したあと、自分の家にたまった片々とした資料、特に書画会の招待状を多く張り込んだものが、このスクラップブックです。「鶏肋」というのは、にわたりの肋骨です。捨てるには惜しいが、不要なもの。どうでしょう、私は漢籍でも朝鮮語でもヨーロッパでも、書名として「この本はいらない」というのはあまり見たことないです（笑）。

数か月前に、たまたま古書店の販売目録を見ていたら、『焦余鶏肋冊 第一集』が



図A-②
『焦後鶏肋冊』中にある書画会の様子



図B-①
『焦余鶏肋冊 第一集』ロバート キャンベル氏所蔵
右上が表紙



図B-②
『焦余鶏肋冊 第一集』中、
曲亭馬琴の70歳のお祝いに
開かれた書画会の招待状。

出ていました。国立国会図書館所蔵本の4年前に作られたものです。これが琴台による最初のスクラップブックだとわかりました。筆跡で琴台に間違いないと思ひ、すぐ電話して求めることができました。ちょっと自慢していいのは、タイトルのところに虫喰いがないことです(笑)(図B-①右上)。

なんと、屏風仕立てになっていました。誰がいつ屏風にしたのはわかりませんが、スクラップが家の調度品になるなんて、日本の書物の多様性を語っています。中身は、やはりほとんどすべてが招待状。特に書画会の招待状です。

こちらには、曲亭馬琴(1767・1848)が70歳になったお祝いに開かれた書画会の招待状(図B-②)があります。書画会は還暦など節目に催すことがよくあるのですが、この会には特殊な事情がありました。滝沢家は武士ですが零落し、馬琴は孫のために御家人株を買いたいから何百両というお金が必要になりました。そこで一流の文化人を集めて書画会を開催したのです。馬琴も当日、多くの扇子に揮毫して配り、とても疲れた、と日記にあります。予定の数倍の人

が集まって、無事、御家人株を買うことができました。

明治初期の日本の漢詩壇を代表する大沼枕山(1818・1891)が竹内雲濤(1815・1863)と連名で、詩を提供するため書画会を開いた招待状もあります(図A-③)。毎月開催していました。匡郭(粹)の外に「百文で軽食を差し上げます」と書いてあります。

ほかには出版記念会。最初にこうした会をやると、どんと売れます。今と同じですね。『美人百詠』という書物の出版祝いは鈴木松嵐(生没年不明)という人が会主ですが、会幹(幹事)として東條琴台が入っています。また、華山とあるのは、渡辺華山(1793・1841)かもしれません(図B-③)。

このように、当時の文壇で人脈がからみあっている様子がみとれます。一枚の資料としてはそれほど大きく響かないかもしれないものでも、たくさんあると、その人の行動や、誰と一緒に、芸術に、文芸に関わっていたかがわかります。一冊のスクラップブックから、江戸という宇宙が見えてくるのです。

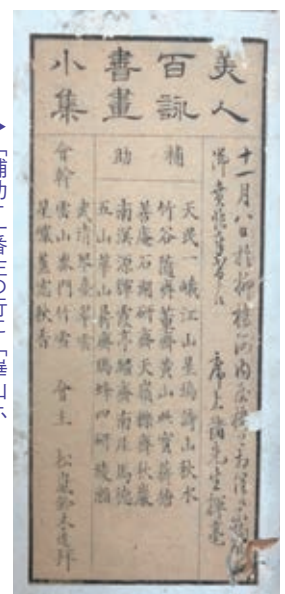


図A-③
『焦後鶏肋冊』国立国会図書館所蔵

▲匡郭(粹)の左に「受当百枚供淡飯麴茶」とある。(「当百」は天保通宝のこと。一枚が百文に相当)



そのほか、文房具屋さんが作成した、お正月の書画会の予定がわかるカレンダーや、書家や画家の連絡先がわかるタウン情報誌など、様々な資料の中にひろがる数々の「小宇宙」をご紹介いただきました。



▶「補助」一番右の行に「華山」、
「会幹」一番右の行に「琴台」とある。

図B-③
『焦余鶏肋冊 第一集』中、
『美人百詠』出版祝いの書画会招待状。

本でまなぶこと 街が教えてくれること

井上 章一

2018年11月10日(土)に関西館の大会議室で行われた講演会の様子をダイジェストでお伝えします。
(講演筆記・文責 本誌編集担当)

私は国会図書館に1980～1990年代くらいは本当によく通いました。当時関西にはまだなかったので、東京本館です。最大のお目当ては、戦前・戦時の発禁本^(注)です。内務省の検閲を受けて出版が差し止められた本を見たくて、よく通っていました。閲覧願いを出すと20分から30分待たされます。その暇つぶしの時に私はよく開架コーナーに置いてある新聞の縮刷版を見ました。私は阪神タイガースをひいきにしています。昔の阪神の栄光の記事を読みふけていました。江夏の黄金時代、村山が輝いた時代を振り返っていたわけです。

昭和37年10月4日の新聞記事も見ました。その前日に阪神はセ・リーグで優勝しているんです。私は驚きました。甲子園球場に集まった2万の阪神ファンが優勝を祝っている。「優勝決定戦で2万人しか来てへんの？」という疑問を抱くわけです。球場が発表する数字だから、新聞によって数字が違うこともあります。しかしどの新聞も2万人でした。日経新聞には外野席の写真が写しだされています。驚きました。優勝決定戦なのに外野席に客がいないんです(会場笑)。私は即座に判断することができました。絶対2万人入っていない。優勝のご祝儀でこの数字は膨らまされている。

ですが、そのことを当時の新聞記事は全く不思議がっていませんでした。ひよっとしたら阪神ファンは1960年代あまりおらんかった人と違うかな。そう考えたところに、閲覧願いを出して

井上 章一氏

国際日本文化研究センター教授。京都市出身。京都大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。専門は風俗史。

京都大学人文科学研究所助手、国際日本文化研究センター助教授、同センター副所長を経て現職。

『美人論』『京都ざらい』(ともに朝日新聞出版)など著作多数。

(注) 発禁本について『国立国会図書館月報』2017年12月号記事「米国に残された戦前の検閲の痕跡」で解説しています。
http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10991743_po_geppo1712.pdf?contentNo=1#page=6

いた本が到着して読めるようになるわけですよ。でも、優勝決定戦に客が入っていないという方が気になってあまりそれが読めないわけです。心を鬼にして阪神から関心を閉ざしました。

その後、私は地元の本郷図書館で新聞の縮刷を読み漁りました。そして確信を持つに至りました。阪神電鉄の沿線に1960年代、阪神ファンはあまりいない。ジャイアンツファンの方が数ははるかに多い。関西の球団で最もひいきをかけていたのは、南海ホークスだと（会場笑）。

今の阪神ファンを揶揄したのはどこの誰なのだろう。現在、この地域に住む野球好きの多くが阪神をひいきにしています。プロ野球に気持ち傾ける人たちの7〜8割くらいは阪神びいきになっていると思います。スポーツ新聞には一面、二面、三面まで阪神のしょうもない記事が出ています。私たちはその環境に慣らされています。いったいいつ頃から、なぜこういう状態になったのだろうということに気がするようになりました。私にこれが研究テーマになると教えてくれた

のは国会図書館です。より正確に言えば国会図書館の閲覧に至るまでの待ち時間です。

私は美人の研究に凝っていました。

明治24年に出版された女学校の修身教科書を大阪の古本屋で見つけました。明治・大正時代、昭和の戦前・戦時期、女の子たちは中学校へ進学することはできませんでした。女学校へ行きます。その修身教科書に、驚くべきことが書いてありました。「美人には勉強ができません、勉強ができるのは醜い人です」（会場笑）そう教科書に書いてあったんです。感動しました。

その後、東京国立教育研究所に通いました。そして戦前に出された女学校の修身教科書を片っ端から読んでいきました。多くの教科書に本当にそう書いてありました。こんなのもありました。「美人には勉強ができない。だけどがっかりしてはいけない。あなたも醜い女の気持ちを宿せば学業は身に着くのだ」と書いてあります（会場笑）。ひどい話ですが、あの時代に美しい女学生は本当に勉強が

しにくかつたんです。平均結婚年齢が今よりずっと低い。満年齢15、16くらいでお嫁入りすることが珍しくなかった。明治時代の女学校は嫁入りのあっせん機関でもありました。

ですから授業参観という仕組みがありました。近隣在郷の有力者が見に来て息子の嫁を選ぶんです。1回の授業で嫁選びをします。だから見た目で選んでいくんですね。かわいらしい御嬢さんやきれいな御嬢さんは、女学校5年間の授業を全うする前に退学していくんです。女学校5年間、無事卒業する人たちのことを当時の教育界用語で「卒業面」と呼んでいました（会場笑）。あんまりやと思いませんか。

大正5年に刊行された『婦人と犯罪』という研究書を国会図書館で見つけました。著者は確か寺田精一だったと思います。恐るべき調査が載っていました。女性犯罪者260名の容姿を5段階に分類してしました。「美、上、中、下、醜」何のためにこんなことをするのか。殺人犯はきれいな人に多いのか、不細工な人に多いのか。窃盗はどうか、詐欺はどう

か。顔の良しあしと犯罪にはどんな因果関係があるのかを調査していました。

戦前の刑法に姦通罪というのがありま

す。夫を持つ女の人が浮気をすれば、夫はその妻を姦通罪で訴えることができました。なんとこの姦通罪で訴えられる人たちは「中、下、醜」に集中してしました。これについての警察のコメントが凄

かった。「美人妻に不義密通がないわけ

ではないだろう。ただ、妻が綺麗な場合は夫が妻を手放したくないので訴えない。だからこういう結果になったのだろう」と添えられていました。私はこのコ

メントが合っているかどうかわかりませんが、こんなことを活字にして大丈夫な時代があつたのだということに慄いたわけです。そこから生み出されたテーマが

これです。美人だとか美人じゃないとか、活字で書いてもいいこと、書いてはいけないことが、ここ100年くらいでどう

移り変わってきたのか、これが私の『美人論』という本です。

本をたくさん読んでいると面白いことが見えてきます。それぞれの本はそれぞれの時代の書き方をしてい

それぞれ時代の風向きが透けて見えま

す。また、本を書く人にはそれぞれの立場の違いによって、内容にズレが出てき

ます。そういうものを、たくさんの本で一つのテーマについて読んでいくとそういうものが見えてくると思います。本そのものから本を疑う気持ちが養える、と

考えています。

法隆寺をご存知だと思います。あそこの中門と金堂、柱の中ほどが少し膨らんでいることをご存知でしょうか。大工はこれを胴張りと呼んでいます。歴史の教科書は、ごく近年までエンタシスと書いて

いました。古代ギリシャ建築の柱も、やはり中ほどから下が膨らんでいるんです。これってよく似てる。それでこの法隆寺の柱もエンタシスとしばしば言われていました。法隆寺にギリシャの影響があつたのだと、私は中学の時、学校で習





く。インドの仏教が日本に伝わる。日本に伝わる時、今のアフガニスタン、パキスタンあたりに伝わったギリシャ文明と一緒に持ってくる。その証拠に法隆寺の柱は膨らんでいるんだ。みなさん、法隆寺にはヘレニズムが届いているんですよ、みたいな授業を私は中学の時に聞きました。感動しました。ああ、世界は一つやったんや、みたいな思いを抱きました。

でも申し訳ありませんが、ウソです。何より、途中のアフガニスタン、パキスタンには、柱の膨らんだ考古学遺跡は一つもありません。あるのは、どこも膨らまず、まっすぐに立つ柱だけです。しか

も、肝心の古代ギリシャ、柱の膨らむ様式はアレクサンダー大王が登場する百数十年前に無くなっています。アレクサンダー大王時代の柱はまっすぐです。ですから、これは作り話です。

中国に竜門石窟があります。北方の遊牧民族である拓跋氏たはばしが作った遺跡です。この柱がエンタシス風に膨らんでいきます。ですから法隆寺に届いたのは中国の北方遊牧民族が拵えたデザインですね。でも私たちはギリシャから届いたと思う方が嬉しかったんです。でも間違いは間違いです。

この間違いを有名にしたのは、伊東忠太という建築家です。平安神宮の設計をした人です。伊東忠太は若い頃ジェームズ・ファーガソン (James Fergusson) という人のことを勉強しました。ファーガソンはインド考古学者です。『History of Indian and Eastern architecture (インドおよび東洋の建築史)』という本を書いています。ユーラシアの文明で偉大なのはギリシャの文明が届いたところ。だからインドの西北部までは素晴らしい建築文明がある。ここを超えろとろくなく

のがないという、そういう価値観で書かれた本です。明治の建築や美術や考古学人はこういうものを学ばされるわけです。くそっと思った人もいたでしょう。くそっと思った伊東忠太は法隆寺に行くんです。それで法隆寺の柱が膨らんでいる様子を見るわけです。ファーガソンはギリシャ文明はインドまでしか届いていないという。そんなことはない。日本まで届いている、その証拠に柱が膨らんでるやないか、というのが始まりです。

私はこのことを明らかにしたくて、ファーガソンが英語で書いた本を読もうと思いました。古本屋さんの目録に、いつだったか出品されていたけど7万円を超えていました。ちょっと辛いなあと思ふ、うちの研究所に頼んで、買ってもらいました。私の手元に届いたんです。驚きました。表紙を開くでしょ、扉のページに伊東忠太という蔵書印が押してあったんです(会場笑)。伊東忠太がこれを読んだ、鉛筆でいろいろ書いていますよ、ファーガソンの悪口を。これで私は自分の見立てに確信を持つことができました。文献を操る研究者の端くれと

して、私の人生のハイライトはこれです（会場笑）。

* * *

ここで、街で教わった話に移りたいと思います。私は京都大学で建築の勉強をしました。1970年代の半ばころ、京町屋の調査というのをしました。測量もする、撮影もする、そうして町屋の暮らしというのはどういふものかというのをきちんと記録する作業です。聞いていたいたらわかる通り、私は京都弁です。私の指導をしてくださった先生は、私を挨拶係にしました。町屋のご主人の所に行ってお願ひするんです。これから測量させていただきます、写真を撮らせてください、ちょっと生活には迷惑をお掛けしますが、よろしくお願ひしますと。君、京都弁やから君言ってくれへんかと。よくその挨拶に伺いました。

私の京都弁を聞いてご主人はこうおっしゃいました。「君どこの子や」「嵯峨です。嵐山のそばで育ちました」「懐かしいな。あの辺のお百姓さんがよううちへ肥を汲みに来てくれたわ」と初対面でおわかれたことはあります（会場笑）。京都

の人達は大変気位が高いわけです。

町屋の中にはやや数寄屋風の意匠を凝らしたところがありました。私は学生同士で言うわけです。「数寄屋風やね、ここ」って。あるおばあさんから言われました。「数寄屋というたらあんた、お妾さんのおうちやないか。うちはそういうものと違う」です。だけど私は学校の勉強で数寄屋といえはお妾さんの家という教育を受けていません。どの数寄屋研究を読んでも、妾宅風とは書いてありません。だけどそのおばあさんは数寄屋といえはお妾さんの住宅と考えたはるわけです。私の教養はこうでした。数寄屋というのは本来茶室風にデザインされたものを散りばめたものやと。その色と形は少しアールデコに通じている。モダンデザイン風のものもある。ところがです。

大人になって、私も祇園あたりのお茶屋さんへ行きました。驚きました。芸子さんの集まる宴席ですが、やはり造りは数寄屋風になっている。学校の勉強では習いません。でも、花街の館は大なり小なり数寄屋風だったんです。そして昔のお妾さんは、その多くが花街から引き抜

かれたでしょうし、妾宅が数寄屋風になつていくというのは大いにあり得る話だなあと。それは確信を持つに至ります。



井上先生はこのほかにも、美人の描き方の基準や、日本とヨーロッパの街並みの違いなど、たくさんのお話をしてくださいました。どれもユーモアに富んでいて、日常の些細な事柄に様々な謎が隠れていることに驚きました。

New

あの人^の蔵書

国立国会図書館と特殊コレクション

一般に図書館の蔵書コレクションは大きく「特殊」と「一般」に分けられます。各館の創立者や支援者などを顕彰するため、あるいは特殊主題の蔵書を強化するため、すでに個人や機関が持っていた資料群が図書館に入ることがあり、それが一般図書と別に排架・管理されると「特殊コレクション」と総称される資料群になります。

さらに、一枚物の地図や楽譜など形態が特殊で、一般コレクションと混排できずに別置^{べつち}される場合にも、特殊コレクションと呼ばれます。

国立国会図書館は、法定納本による新刊書を一般コレクションとして書庫内に編成すると同時に、創立以来、100件以上にわたる個人や機関のコレクションを統合・収蔵してきました¹。

一部の資料群はその性格を考慮し、特殊コレクション²として別置されてきました。例えば憲政資料室の政治家の文書などです。しかし、多くは、主題からのアクセスを保証するため——コンピュータ目録が不十分な時代（1990年代まで）、分類で並んだ本を書庫で見つけることは、司書の極めて重要な役割でした——一般コレクションに編入・混排されてきました。これらは知人ぞ知る存在となっているかもしれません。

今回から始まる不定期連載「あの人^の蔵書」は、別置されたもの、あるいは一般コレクションに編入されてしまったもののうちから、特徴のあるものを紹介するシリーズです。図書のタイトルや主題分類など、一般事項から検索するのは異なる文脈で資料を探索するヒントとなれば幸いです。

第一回目は国立国会図書館の創設に関わったヴァーナー・W・クラップのコレクションを紹介します。

(小林 昌樹)

クラブ・コレクション



クラブの履歴と国立国会図書館とのかわり

ヴァーナー・W・クラブ（1901-1972）は米国議会図書館副館長（1947年就任）となり、後に図書館振興財団（Council of library resources）の理事長になった人物です。米国内では議会図書館における議会専門部の設置や、図書館業務の機械化に功績があったことが知られていますが、国立国会図書館に彼の個人コレクションがあるのは、まさに国立国会図書館の制度設計を行った人物だからです。

米国占領軍の示唆もあって国会に巨大な国立図書館を付設することになりましたが、その経営ノウハウを欠く衆参両議院は、1947年、米国から図書館使節を招聘しました。使節は、米国図書館協会東洋部委員長チャールズ・H・ブラウンと米国議会図書館副館長ヴァーナー・W・クラブという2人の著名な図書館人から構成されており、1947年末から翌年始めにかけて、国立国会図書館の使命や組織機構、法定納本などの制度設計を使節勧告という形で示します。以後、半世紀以上にわたり国立国会図書館は彼等の勧告に従って業務を展開してきたといってもよいほどで、例えば勧告にあった「支部図書館」制度は、当時米国でも珍しい相互協力「図書館システム」の先駆でした。

クラブは国立国会図書館への尽力をなつかしく思っており、また支部図書館制度の実現に尽力し、後に副館長となった酒井悌^{やすし}などと親交を深めたため、クラブの死後、ドロシー夫人の申し出により旧蔵書が当館に贈られ、クラブ・コレクションが出来ました。

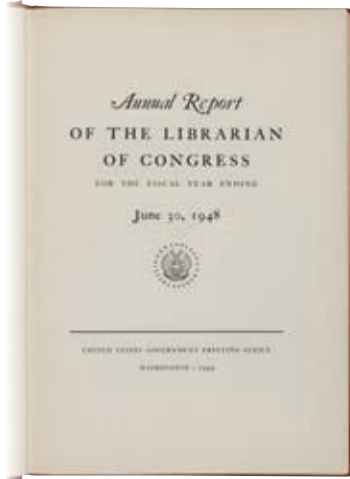
クラブ・コレクションの概要

図書館情報学関係の図書343点と、リーフレット256点から成り、国立国会図書館特殊コレクションの中では小規模な方です。1973年に寄贈を受けた後、図書館情報学資料室で開架されていましたが、2002年3月の同室廃止を承けて、2004年6月から人文総合情報室で利用できるようになりました。

資料の主題構成はクラブの職歴をほぼなぞるものとなっており、図書館振興財団の年報などは日本国内では珍しいものです。彼の業務上の課題だったと思われるものとして、著作権関係、複写機関係のものが目を引きます。ここでは興味深い痕跡が遺されている資料を数点ご紹介します。

■ Annual report of the Librarian of Congress for the fiscal year ended ...
U.S. G.P.O. 1949 【UL231-3】

クラップが副館長を務めていた米国議会図書館の年報です。



OFFICE OF THE LIBRARIAN
Alva B. Walker, Administrative Secretary.
Marlene D. Wright, Special Assistant.
OFFICE OF THE CHIEF ASSISTANT
LIBRARIAN
VERNER W. CLAPP, Chief Assistant Librarian.
Exhibits Office: Herbert J. Sanborn, Exhibits
Officer.
Information Office: Milton M. Plumb, Jr.,
Information Officer.

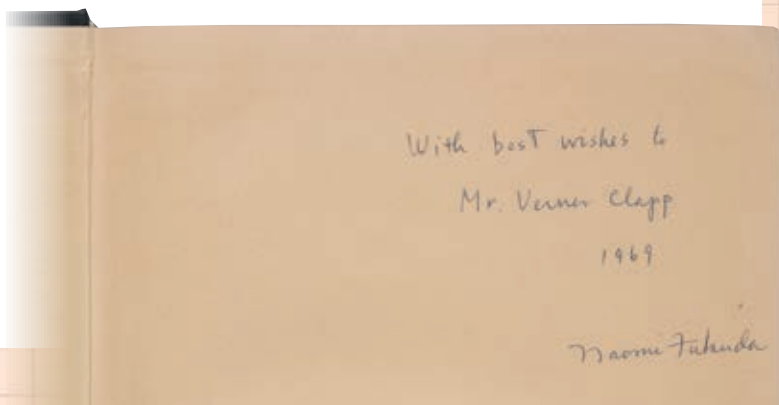
Chief Assistant Librarian にクラップの名前が
記されています。

but of some fifty American libraries having Japanese interests, spent six months, October 1947 to March 1948, in Japan in the interest of acquisitions. His visit resulted in the procurement of more than 11,000 pieces of material. At the request of General MacArthur's headquarters Mr. Verner W. Clapp, Chief Assistant Librarian, was detailed for a period of three months, in company with Dr. Charles H. Brown of Iowa State College, to advise the National Diet of Japan in the organization of library facilities. Dr. Leslie W. Dunlap, Assistant Chief of the General Reference and Bibliography Division, spent two weeks in Mexico studying the problem of a new library for the University of Mexico and preparing a report for the Rector, Dr. Salvador Zubirán.

1948 年報告の 25 ページに数行、日本への図書館使節派遣について書かれています。

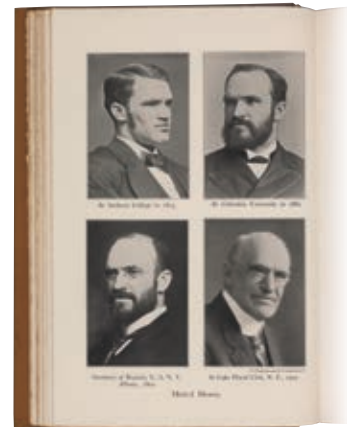
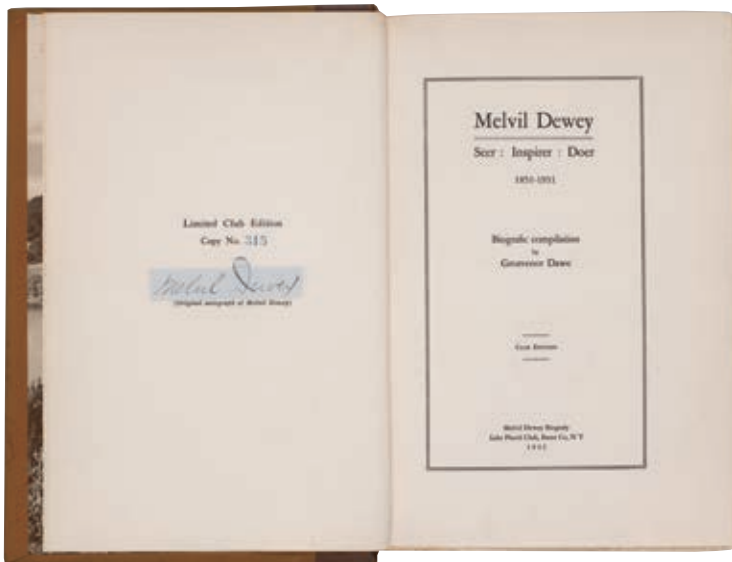
■ Union catalog of books on Japan in Western languages Reprint edition / edited by Naomi Fukuda. International House Library, 1968【GB1-3】

国際文化会館が欧文で出版した、日本関係洋書の総合目録です。見返し紙に「With best wishes to Mr. Verner Clapp 1969 Naomi Fukuda」とあるのは、おそらく国際文化会館の司書・福田なみ（1907-2007）の直筆でしょう。福田は戦前、米国議会図書館に勤めた坂西志保（1896-1976）の跡を承け、日米図書館界の架け橋となっていたキーパーソンです。戦後の日米関係を象徴する書込みです。



■ Melvil Dewey, seer: inspirer; doer, 1851-1931. Biografic compilation by Grosvenor Dawe. Club edition. Melvil Dewey Biografy, 1932. Signature of Dewey pasted in【GK425-26】

著作家ジョージ・クローヴナー・ダウ等によるメルヴィル・デューイの伝記です。実務書の多いクラブ・コレクションのなかでは珍しく研究的なものです。十進分類法を確立したデューイの直筆サインがタイトルページ裏に貼りこまれています（下見開きの左側中央）。



各年代ごとのデューイの肖像。

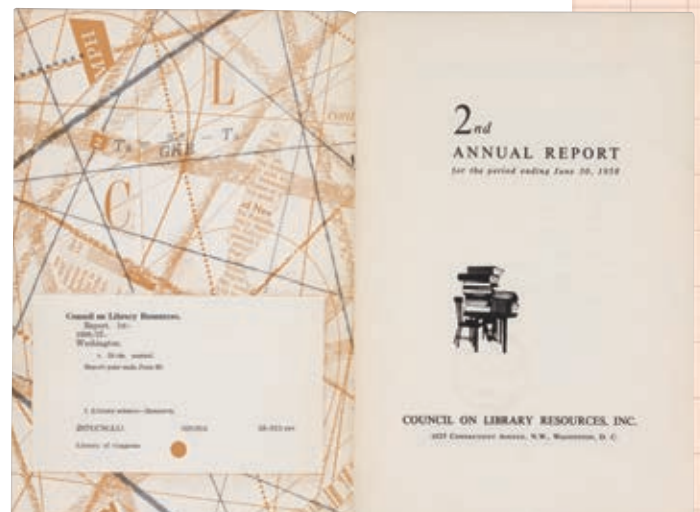
■ Annual report. Council on Library Resources【UL3-13】

クラブが理事長を務めた図書館振興財団の年報です。スプートニク・ショック（1957年）を受けて米国の図書館学が図書館情報学へと発展しはじめた時代を反映し、図書館機械化の研究開発を進めていました。内容やデザインからもそのことがわかります。



(左) 3d; 1958-59 (真ん中) 6th; 1961/62 (右) 2d; 1957/58

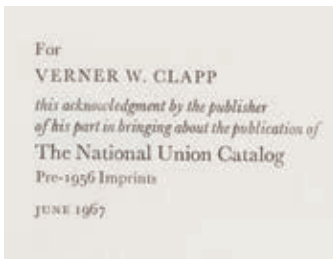
3dの表紙の図版は、Agostino Ramelliによる1588年刊本より採られたもので、図書館振興財団の2つの関心（図書のコンテンツ、図書館サービスの機械化）を象徴しています。発想としてはウィンドウズ（複数のテキスト窓を同時参照する）と同様のものと言えます。また、表紙にクラブの受領サインがあるものも。





■ Prospectus for the National union catalog, pre-1956 imprints. Mansell, 1967【YP21-4】

一昔前の司書なら誰でも知っていた総合目録のガルガンチュフ“National union catalog”(1968-1981,754巻。略称 NUC)³。その刊行趣旨説明がこれです。目録カードの特殊印刷の技術を持っていたロンドンの Mansell 社が出版することとなり、この刊行趣旨説明も同社で出版されました。この目録は印刷カードをそのまま圧縮したもので、この刊行趣旨説明も後半が NUC の実物大内容見本(抜き刷り)となっており、そのために大型本です。これは関係者だったクラブのため特別に製本された一本でしょうか。前見返しの遊び紙にクラブ宛ての献辞が印刷されています。NUC【UP6-21】は今、書庫内にありますが、しばらく前まで東京本館目録ホールに開架され、職員も利用者もよく参照したものでした。



■類縁コレクション

●クラブ文書

<https://www.loc.gov/item/mm79049916/>

米国議会図書館にクラブの実務文書が遺されています。日本への旅行記録や、当館副館長だった酒井悌、斎藤毅らとの往復書簡もあるようです。

●図書館学のコレクション

クラブ個人と直接の関係はありませんが、図書館学に関するコレクションとして国内では、出版物系で虎文庫(鶴見大学図書館、神奈川県)、間宮文庫(富山県立図書館)があり、文書系で伊東平蔵関係資料(横浜市中央図書館所蔵。日記、書簡類の複製)、中田邦造関係資料(石川県立図書館)、長田富作資料(大阪府立図書館)などがあります。

現在、国立国会図書館でデジタル化準備中の帝国図書館文書もそうですが、これらのコレクションのうち文書系のものは、図書館史・学史としてだけでなく、出版史や検閲史の史料としても期待されます。

1 馬場萬夫「国立国会図書館所蔵コレクションの紹介」『図書館協力セミナー 昭和62年度(国立国会図書館のレファレンス・サービスを中心に)』国立国会図書館, [1987] pp.23-48【UL21-E3】

2 国立国会図書館では一般コレクションも膨大な量になるため、旧蔵機関や受入れ年代ごとの下位区分ごとに呼ばれ(帝国図書館旧蔵「旧函架」など)、特殊コレクション的な呼び名を持っています。個人文庫など一般とは別置されている本来の特殊コレクションは「コレクション」と呼ばれる傾向にあります。

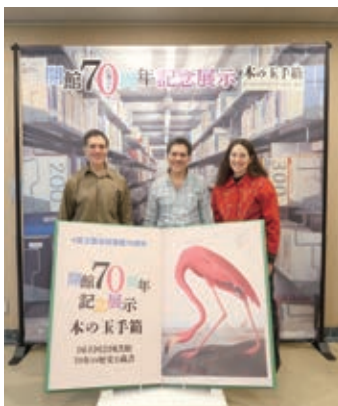
3 土井稔子、枝松栄「全米総合目録の成立とその背景 National Union Catalog, Pre-1956 Imprints を中心に」『参考書誌研究』(9) p.1~29 (1974.5)【Z21-291】



クラップさんの思い出

—レベッカ・ロウさんインタビュー—

ヴァーナー・W・クラップ氏のお孫さんである、レベッカ・ロウさんが2018年11月5日、国立国会図書館（NDL）東京本館に来館しました。羽入館長との懇談、人文総合情報室と開館70周年記念展示でクラップ氏の報告書や蔵書を観覧後、本誌でクラップ氏のお話を伺いました。



70周年記念展示の撮影コーナー。右から、レベッカさん、夫君のピーターさん、その双子の兄弟のポールさん



羽入館長に、1947年のクラップ氏の手紙を見せる

はじめまして。お会いできてうれいいで
す。NDLの印象はいかがですか？

ここに来て、祖父が日本の図書館の皆様と一緒に成し遂げたものを目の当たりにできて、とても光栄です。展示も見られて、すごく満足しています。

おじいさまの印象をお聞かせください。
レベッカさんがいくつのおときまで、おじいさまはご存命だったのでしょうか。一緒に住んでいらしたのですか？

赤ん坊の頃は一緒に、そのあともすぐ近くに住んでいました。祖父の家は大きくて素敵で、裏庭には桜の木があって、訪ねるのがとても楽しみでした。毎日曜日と、誰かの誕生日には必ず、一緒に夕飯を食べました。

祖父が亡くなったのは1972年です。

私は13歳でした。私は祖父の仕事のことは全く理解していませんでした。私にとっては、いつも面白くて、優しくて、家族を笑わせてくれる祖父でした。歌いながら私や兄弟を高い高いしてくれたり、投げつけてキャッチしたり……遊び心のある人でしたね。

母やおじやおばが、祖父の話をいろいろ聞かせてくれましたが、自分で地下室を掘って作ったこともあるそうです。

家のことはなんでもやる人でした。趣味も多かったんです。木彫が好きで、ポケットナイフでいろんなものを彫っていました。一つの角材から輪っかがつなごうとした鎖を削り出したり。

輪っかを作らずに？ それはすごいですね。

そうした方法を編み出すのが得意な人でした。それから、勉強好きで、科学、歴史……なんにでも興味をもっていました。もちろん図書館も。「図書館員の中の図書館員」と呼ばれていたそうです。でも私はそうした面は全く知らなかったんです。

今回いらつしやる前に調べたのですか？

論文や、『National Diet Library Newsletter』（NDLの英文広報誌）も読みましたよ。おばや母も手伝ってくれました。祖父の日記も読みました。祖父は13歳のときから、日々の記録を毎日つけていたんです。それから家族や同僚への手紙も。日本での仕事の進捗を伝えていました。

日本への旅についてお尋ねします。当時のNDL職員が書いた記事には、おじい



1962年のクリスマスのクラップ一家。
前列左端の蝶ネクタイがクラップ氏。
中央の赤い吊りスカートの子がレベッカさん。



「利用者登録しました!」

さまが1947年12月に来日した際は

(当時の飛行機の性能や戦後の事情もあり)、来るだけでとても大変だったとあります。最初に泊まったホテルにはタオルもなければお湯もでなかったそうですね。そうした苦労話は聞いていますか？

今回、祖父が祖母にあてた手紙を読んでも知りました。コピーを持ってききましたが、祖父がそこにいる姿を思い浮かべることが出来るくらい、臨場感たっぷりに書かれていますよ。こうした中でも、祖父は全く不平を言っていないんですよね。「冷たい水のおかげで元気づけられたよ!」と。とてもポジティブな人でした。

ユーモアのセンスもありますね。

1968年に祖父母がNDLの開館20周年式典に参加するために日本を訪れた時、祖母は腰を患っていたのですが、図書館の皆様と一緒に日本文化を体験したくて、二人とも慣れない座敷で食事しようとしたそうです。小さな机を用意してくれたんじゃないかな。祖父と日本の図書館の方々との間には本物の友情があったのだと思います。

レベッカさんは生前、おじいさまから日本の話を聞いたことはありませんか？
本には覚えていません。たくさんのお話をしてくれましたから。私たちが知っ

ているのは、祖父が冒険好きだったということ。異なる文化について経験するのが好きな人でした。クリスマスには、祖父母は世界中からのお客様を迎えてパーティを開いていました。

では今回、日本や日本の図書館員との関係を知って驚かれましたか。

ええ。そして、祖父にとってそれが非常に重要だったということ、日本の図書館の進展に強い関心があったことが手紙や記録から強く感じ取れました。

我々は普段、70年前の創立時のことはほとんど意識していません。でも今回、70周年の年に、クラップさんのお孫さんにお会いできたことはとても幸運です。クラップさんの業績、創立時の理想を思い起こすことができました。

私にとってもそうです。祖父がこの場所でのどんな仕事をしていたのかを実感することができてとても嬉しく、また楽しい経験でした。帰ったら、家族や親戚に大展示会を開いて報告しますね。この登録カード、母やおば達もみんなきっと羨ましがると思います! (笑)



本の森を歩く 第20回

地図から消えた庭

小沢文庫から

里見航

日本庭園とは

「日本庭園」という言葉から連想されるイメージは、池を中心に緑や水が豊かな回遊式庭園から、砂や石をメインとする枯山水、また茶室に付随する茶庭やこぢんまりとした坪庭など、人によって様々でしょう。

筆者は、徳島城博物館にある「旧徳島城表御殿庭園」（左上写真参照）の風景が原点として思い出されます。この庭園は、現在徳島中央公園として整備されている徳島城跡の一角にあり、南東部が枯山水、北西部が築山泉水庭と、異なる二つの庭園をつなげたような形になっているところや、どちらの様式にも阿波の青石をはじめ、徳島で産出された名石を数多く使用しているところに特色があります。公園を走り回っていた子供の時でも、この庭園を訪れると、池で休む鳥や風景をぼんやり見ながら庭園を味わっていたことが思い出されます。

ただ、あまりにも身近に庭園や緑豊かな公園があったからでしょうか、庭園の持つ魅力に改めて気づいたのは地元を離れてからでした。最初は近場に

あった東京都の都立庭園などを訪れていましたが、その後日本三名園と言われる金沢の「兼六園」、岡山の「後楽園」、水戸の「偕楽園」を訪れたり、京都の神社仏閣に残る庭園を拝観したりするようになり、今では各地の庭園を旅行がてら巡っています。

日本庭園のデザインの根源には、奈良時代に唐から入ってきた中国庭園の影響があると言われていますが、その後は日本の生活や風土を反映しながら独自に発展し、現在では日本文化の一つとなっています。

平安時代の寝殿造庭園や浄土式庭園、鎌倉時代から室町時代にかけての書院造庭園や禅宗寺院の庭園など、変化しながらも脈々と庭園文化は受け継がれてきました。その後の発展は大きく二つに分かれ、中世の文化、主に茶道と結びついた室町時代の庭園と、写実的な江戸時代の回遊式庭園に分けられます。特に後者の園池や築山で構成され、作り込まれた池泉庭園は、大名の屋敷に造営されており、接遇の空間としての役割を担っていたそうです。

意外なことかもしれませんが、江戸時代までは「庭園」というよりも、「島」

や「庭」、「林泉」といった呼称が一般的であったようです。庭と園の合成語としての「庭園」が広く一般に使われるようになったのは明治時代に入ってからであり、幕末から明治初頭にかけて大名屋敷や寺院にあった日本庭園が荒廃していく様子を、その来歴と共に記述した「明治庭園記」(『明治園芸史』所収、大正4(1915)年刊)がきっかけと言われています。「明治庭園記」の著者である小沢圭次郎(1841-1931)は、日本庭園研究の先駆けとされる人物であり、江戸末期から明治、大正時代にかけて日本庭園文化の保存に精力的に取り組みました。

小沢圭次郎

小沢は天保13(1842)年に、江戸の築地にあった桑名藩下屋敷に侍医・小沢長庵の次男として生まれました。後に紹介しますが、この下屋敷には「浴園」と呼ばれる名園がありました。これが小沢の庭園研究のルーツと言われています。一時は江戸を離れ、長崎や大坂に滞在しながら漢学と医学を修め、22歳の時に兄の跡を継ぎ桑名藩医となりました。

幕末の激動期は桑名で過ごし、またこの時期に藩命を受け、英学も学びました。明治3(1870)年に上京し、東京師範学校の教官などを務めます。その後明治19(1886)年に職を辞し、庭園史の研究や、公園の設計、名園の復元に積極的に取り組むようになりました。

小沢の研究活動の背景には、明治維新後、廃藩置県や廃仏毀釈運動により、各地にあった武家屋敷や寺社の荒廃が進んだことがあります。これらを実際に目にした小沢は、当時の荒れようを「明治庭園記」の冒頭で「最も荒涼に傾きて、凄惨たる光景を露呈せざる者は、殆ど之あらざるほどの衰頹に及びたり」と嘆いています。小沢は、古来の作庭法や庭園の記録を留めるため、仕事の合間に資料を収集したり、資料の写しを作成したりしました。

一方、西欧文化の導入が進む中で、エドワード・モースやアーネスト・フェノロサ、ジョサイア・コンドルといったお雇い外国人による伝統的な日本文化の見直しが進み、日本庭園もその中で取り上げられるようになりました。こうした流れの中で、岡倉天心らが創刊した美術雑誌『国華』に、明治23

(1890)年から明治38(1905)年まで、小沢が執筆した「園苑源流考」が掲載されました。

明治34(1901)年には、日比谷公園の設計案を(採用はされませんでした)が、当時の東京市に提出したり、明治43(1910)年にロンドン郊外で開催された万国博覧会で、日本ブース内に出版された2つの日本庭園の1つに小沢の図案が採用されたりしました。その他にも伊勢神宮神苑の設計など、積極的に日本各地を訪れ活動を展開して行きました。明治44(1911)年から亡くなる昭和7(1932)年までは、東京府立園芸学校の嘱託講師として週一回講義に立ち、庭園文化を伝えました。

小沢の集めた蔵書・資料の多くは、明治27(1894)年の向島大火で残念ながら焼失してしまいました。しかし、罹災を免れたものと火災後に新たに集められた資料約200点が国立国会図書館に保存されており、「小沢文庫」と呼ばれています。大半が庭園の写真です。解説や来歴を記した「識語」が添えられ、小沢の活動内容の一端が分かる貴重な資料となっています。



小沢は自らを「酔園」、「皆園」、「敬齋」と号しており、蔵書印には「小澤文庫」のほか「小澤圭」や「酔園」などが見られます。蔵書印『隅田川御屋舗全図』<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/83369268>より



肖像画『創立六十年』東京文科大学・東京高等師範学校 東京文科大学 1931 <請求記号 FB22-40 >より



『明治庭園記』『明治園芸史』日本園芸研究会編 大正4 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/954476>

小沢は、風景をデザインするという意味で、設計に「設景」という文字を当てていました。

『江戸浴恩園全圖』小沢圭 写 明治17 (1884) 1 鋪
 80 × 160cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9367513>



▲随所に設けられた「亭」は、茶事のための建物というよりは、回遊の途中に立ち寄る休憩所

▲高く四角い建物は「露台」。庭を見渡すための3~4メートルほどの高さの展望台

「明治庭園記」から読み解く江戸の大名屋敷

これから「明治庭園記」と小沢文庫をたどりながら、現在は存在しない江戸の大名庭園をいくつかご紹介します。

江戸だけでも千を超える庭園があったとされますが、その中で名が付けれ、図や記録が残されたり、詩歌に詠まれたりした大名屋敷の庭園は稀であり、現在では記録をたどることが難しい庭園の方が圧倒的に多いです。小沢は自分が見聞きした、かつて庭園があったと伝えられる情報を記録し何とか後世に残そうとした、と「明治庭園記」に書いています。

築地「浴恩園」

— その後の築地市場

江戸時代を通じてもっとも庭園を愛した大名の一人であり、「兼六園」の命名者とも言われる松平定信の屋敷です。

「浴恩園」の名は、幕府より賜った土地に対し、「其恩波に沐浴する」という意味で命名されました。先にも述べましたが、小沢が生まれ育った場所



明治十七年九月廿一日描寫筆 皆園主人小澤圭識

▲横一列に並んでいるのは、桃

▲睡蓮

▲中央下の赤白ピンクは、梅
▲その下は「菓林」

『浴恩春秋両園櫻花譜』 [松平定信]
[編] 狩野良信 写 明治17 (1884)
1軸 27cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542399>

浴恩園の桜を描いた図譜。たくさんの種類の桜が植えられていたことがわかります。



がこの庭園に付属する屋敷です。
浴恩園は文政12 (1829) 年の大火により一度は焼失しました。この図は天保13 (1842) 年時点 (小沢の生年) に火災前の様子を懐かしんで描かれたものを、さらに小沢が写したものです。紅葉と桜が同時に描かれるなど、往時の素晴らしさを目いっぱい表現しています。
焼失したものの池や山は残っていたので修復が行われ、「明治庭園記」によると天保7 (1836) 年には美しい景観を取り戻していたそうです。小沢は10歳前後にはこの園の中で遊んでいたと『風俗画報』に書いています。しかし幕末から明治の初めにかけて荒廃してしまい、跡地は海軍の用地を経て、築地市場となりました。



六園館一大塚公園

『大家里六園館御苑真寫之圖』 皆園主人圭 写 明治17 (1884) 1鋪 80×165cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9367510>

浴恩園と同じく、松平定信の屋敷に造営された庭園です。全景を春園・秋園・果園・竹園・集古園・攢勝園に分け、これらを総称して「六園」と名付けました。この庭園もまた、浴恩園と同じ文政12 (1829) 年の大火で焼失しました。敷地の一部は、現在の犬塚公園 (文京区、一部豊島区にまたがる) となっています。

『尾張大納言殿下屋敷戸山荘全圖』 1鋪 62×72cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9367530>

▼建物左下は「玉圓峰」。現存する戸山荘の名残！
池を掘った土を使った築山で、高さは約15メートルもありました

西早稲田「戸山荘」

—陸軍駐屯所を経て再開発

尾張藩徳川家の下屋敷です。「明治庭園記」によると、「十三萬六千二百七十一坪半」もある広大な庭園で、大雑把に換算すると東京ドーム約9・5個分に当たります。松平定信がこの庭を訪れた際に感激し、天下一の園地だと賞賛したほど見事な庭園で、園内には25もの名勝が作られていました。

幕末に地震、台風、火事に相次いで見舞われ荒廃し、最後は西郷隆盛率いる薩摩兵士をはじめとする御親兵の駐屯所になり廃園したと「明治庭園記」に記されています。その後は陸軍戸山学校となりました。

戦後に再開発され、現在は西早稲田駅付近の都立戸山公園、早稲田大学文学部、都営住宅、都立戸山高校などとなっています。戸山公園内に「箱根山」の名称で「玉圓峰」が残っているのが唯一の名残です。

▶上から流れてくる水は、「龍門の滝」。流れをせき止めておき、人が飛び石を渡る際に一気に水を流して驚かせる仕掛けが、將軍をはじめ訪れる人々に好評だったそうです。

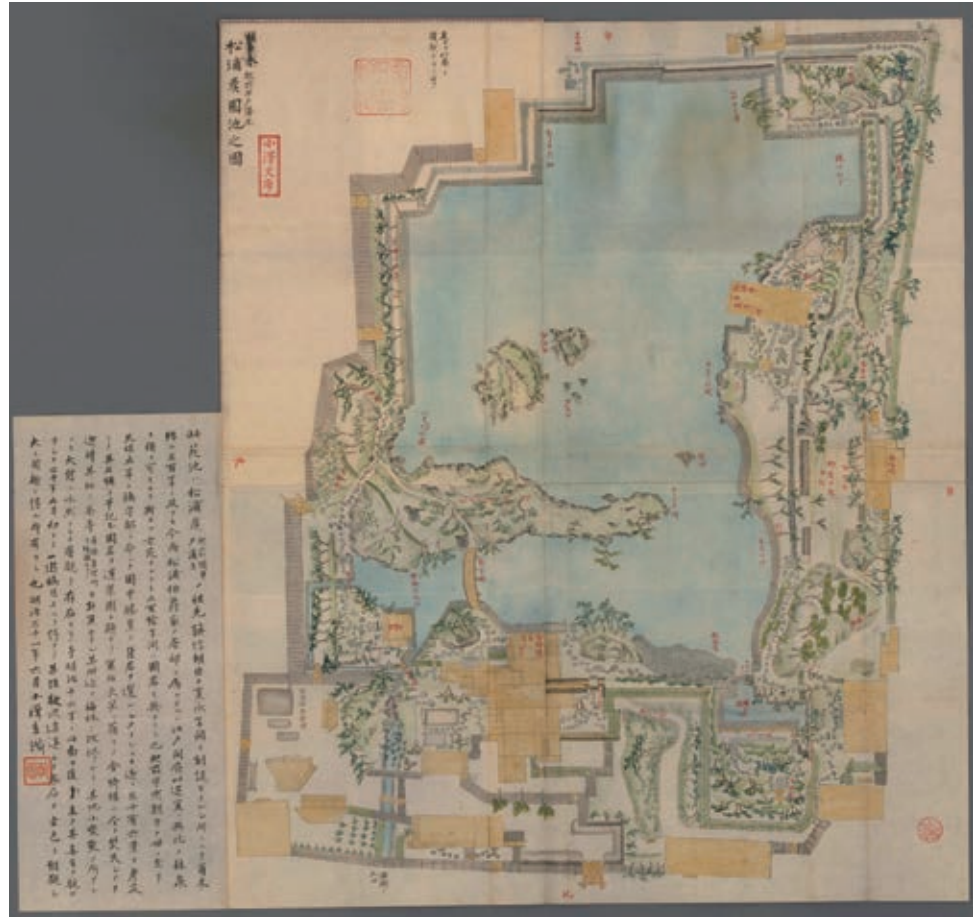


▲池にかかる橋は「琥珀橋」長さ30メートル弱

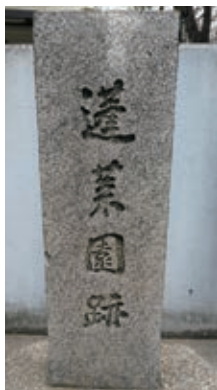
▲下の家並みは、小田原宿を模した宿場の風景



『尾俣戸山苑圖』 平野知雄 [原図] 皆園圭 [写] 明治21 (1888) 1軸 26cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540916>
 別の角度から描かれた絵巻。この場面は北側（上図では左側が北）から「琥珀橋」「玉圓峰（箱根山）」を描いた図。



柳北公園北西部にある蓬菜園跡の碑 (筆者撮影)



浅草橋「蓬菜園」

— 都立忍岡高校、柳北公園等

肥後国平戸藩主松浦家まつらの上屋敷で、寛永9（1632）年に松浦家の要請により小堀遠州が造園しました。「蓬菜園」と名付けられたのは、天保5（1834）年、10代藩主ひろむね熙のときです。実際に名前を選定したのは図に添付された識語にある通り、国学者の橋守部のようなです。

この「蓬菜園」は、江戸の大名屋敷や庭園の中では珍しいことに、明治維新の後も松浦氏一族により庭園が維持されていたそうです。小沢も実際に何度か訪れ、園内を巡って観察し「大に園趣に得る所有り」と記しています。

園図の左下部に「海潮の入り口」と書かれています。池水は隣を流れる鳥越川から水門を通じて直接引き入れる造りになっています。この手法を「潮入」と言い、先に挙げた「浴恩園」など江戸の大名庭園で良く用いられました。

幕末の混乱を経ても残った貴重な庭園でしたが、残念ながら関東大震災により消滅し、今は跡地を示す碑と池の一部、東京都指定の天然記念

物である大イチョウが残るのみです。

地方の庭園

小沢は自らが育った江戸以外の庭園の資料も各地に出向いて集めており、「小沢文庫」に残る地方庭園の中から、二つの庭園をご紹介します。

○延生軒

阿波・蜂須賀家の家老・長谷川氏が代々営んでいた別荘である「延生軒」の資料を小沢が入手したものです。この「延生軒」は城下町から少し離れた向寺山の裾野、標高10数メートルのところにあり、天気が良いれば徳島城下や遠くに淡路島が見える景勝地であったそうです。特に八景六境を選び、それらの詩を作り文を論じるなど、風雅を楽しんでいたようです。長谷川氏の衰退により人手に渡り、歴史の表舞台から消えいつしか荒廃してしまっただけです。

現在は徳島県立図書館などの文化施設が集まった徳島文化の森総合公園として開発されています。



『阿波國名東郡下八幡村長谷川氏別荘延生軒庭園』1鋪 56×47cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9369582>



『安藝國廣島國主浅野侯別荘水主町御茶屋全景』1鋪 54×134cm
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9367559>

当初、由来が分からなかったため「失姓氏」と題箋に書いていましたが、後に詳細が判明し、朱書きで訂正し、判明した経緯も添え書きしています。小沢の丁寧な仕事ぶりがうかがえます。



○参考文献

国立国会図書館 著『人と蔵書と蔵書印：国立国会図書館所蔵本から』雄松堂出版 2002.10<UM57-H2>
 小野健吉 著『岩波日本庭園辞典』岩波書店 2004.3<KA2-H4>
 白幡洋三郎『大名庭園 江戸の饗宴』講談社 1997.4<KA434-G35>
 小林 治人『酔園 小沢圭次郎-伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」』『ランドスケープ研究』58(3) 1995.02<Z11-315>
 小沢圭次郎『園林叢書節録 其一』『風俗画報』第13号 明治23年2月10日<雑23-8>
 小寺武久『尾張藩江戸下屋敷の謎 虚構の町をもつ大名庭園』中央公論社, 1989.12<KA224-E22>
 東京市 編『東京市史稿 遊園篇 第3』東京市 1927-1936<GC65-28>
 福原健生『徳島の庭園』1961<629.21-H779t>
 徳島県教育委員会文化課 編『徳島県文化の森総合公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』徳島県教育委員会 1987.3<GB121-E901>
 多賀谷 麻美, 杉本 俊多『近代広島における「水主町」官庁街の形成に関する研究』日本建築学会計画系論文集 (619) 2007.9<Z16-107>

○與樂園 (与樂園)

「水主町御茶屋」とは、元は広島藩主の下屋敷として造営された「與樂園」のことです。図からは豊かな松林や遠くの方々の見える美しい風景が楽しめたことが窺えます。明治維新後には屋敷に代わり隣に建設された県立広島病院の付属地として、休日などは一般に開放されていたその風景を残すのはこの図だけになってしまった、と書かれています。

庫に園図が残されています。

終わりに

現在は失われてしまった日本庭園を、小沢文庫として保存されている国立国会図書館の資料からご紹介しました。小沢の残した業績によって、私たちは街並みの変化の中で薄れゆく日本独自の伝統的な庭園文化を学ぶことができます。

庭園を訪れた際に、インターネットを通じてデジタル形式の資料からその地の変遷を追うことが手軽にできるのは、現代ならではの利点と言えるでしょう。小沢の情熱を、我々は別の形で引き継ぐことができます。

昨年の開館70周年を記念して、『国立国会図書館五十年史』（1999年刊）より後の20年分の館史を作っています。

監修は管理職ですが、資料収集、調査、執筆は入館3年目から課長補佐クラスの職員が担当しています。20年前を知らない若者の感想が新鮮です。

「砂鉄の入退館カードって何ですか？ ICじゃなくて？」……そういうテクノロジーがあつただよ。「昔あつたDnnaviってシステムはリンクトオープンデータですか？」……オープンデータなんてその頃は無かつたんだよ。当時を知らない人が調べながら書くという試みには、歴史を継承するという意義もあります。「〇〇事業がなぜ実現できたんですか」「じつは……で、〇〇はつくづく運の強い子なんだよねえ」「そうだったんですか！」年長者と若者が、自らの組織の歴史について語り合う図は、なかなか良いものです。

昔の会議の資料や議事録も読みます。「我々の仕事は誰のためのものなのか？」真剣にNDLの未来を考えています。「国会サービスの情報提供機能として主題別閲覧室と合併した調査情報部を新設する」「複写以外にも有料サービスを選択肢として加えるべきである」実現しなかった案もたくさん書かれています。

議事録には、「責任をどうただしているのか」と怒る声、「全体をつかんでいる人は誰もいない」と嘆く声、「議論が濁ってきてスカつとしない」と叱咤する声、「我々にできることはサービスを誠実に行うことだけだ」と励まし合う声。慎重で受け身な印象のNDLですが、奮闘していた様子が生々しく伝わります。

図書館情報学の専門家やOB、現役職員にヒアリングもしました。「〇年9月22日、予算がついたぞって言われて大喜びしたね」日付を覚えている人、「あの日は大雪で、成田に着いたら深夜で」天気を覚えている人、「失敗ではない、試行錯誤の最後に着地するプロセスだ」「あのシステムは無くなってもかまわない、そのときが普及が完成したとき」と誇り高く語る人、「インターネットサービスは好き勝手に作った方が面白いよね」と心意気を語る人、「あれは自分の中で黒歴史だからなあ（笑）」と裏話をしてくれる人。それぞれがそれぞれの場所で、仕事に対して「思い」を持っていました。

過去から聞こえる声、過去を語る声、今それを語り合う声。たくさん声を聞きながら、起きたこと、そして起きなかつたことを、ふりかえっています。

（総務課編集係 聖徳大子）



たくさんの声を聞きながら



本屋に ない 本



(標題紙)

ガチャガチャ大研究
パカッとあけたら「あら、不思議！」
奈良女子大学文学部人文社会科学文化メディア
学コース (小川研究室) 編集・発行
2015.12 146p 21cm
<請求記号 KB297-L28>

カプセルトイ、ガチャガチャやガチャポンなどとも呼ばれるおもちゃを一度は購入したことがある方も多いだろう。最近は一風変わったものや観光客向けのものなど多種多様な商品が販売され、中には大ヒットしたこともある。しかしながら、身近にあるにもかかわらず、カプセルトイについていつ頃誕生したのか、どうやって商品を開発しているのか、どんな人がユーザーなのかなど、詳しいことはあまり知られていないのではないだろうか。そんなカプセルトイについて、様々な切り口から調査したのが今回紹介する『ガチャガチャ大研究』である。カプセルトイの歴史や主な事件を紹介しているほか、開発・宣伝・販売方法の

分析やユーザー層の分析など、多様なテーマでカプセルトイの不思議に迫っている。カプセルトイに関する資料は少ないため、貴重な資料である。本書は、奈良女子大学文学部で開講された「文化社会学演習」の調査報告書である。学生が文献調査だけでなく、自らの足で調査しており、興味深いデータが多く掲載されている。本書によると、カプセルトイは1965年に台東区で初めて導入され、その後爆発的に広がったとされる。これまでに3回のブームがあり、はじめは子どもの人気を集めたものが次第に大人にも広がり、現在はシニールな発想の商品が年齢・性別を問わず人気を博しているそうだ。実際の調査でも、15歳以上

向きのカプセルトイの種類が増加傾向にあることが示されている。本書を読むと、カプセルトイが誕生からどのように進化してきたのか、その流れをつかむことができる。また、カプセルトイの開発者や主な企業などへのインタビューも掲載されており、作り手の考えや取組の一端がうかがい知ることができ、その魅力である。例えば、ある企業は、商品開発では市場調査をあえて行わず、作り手が面白いと思ったものを商品化していると回答している。さらに、商品単価が低く販促にお金をかけられない中、効果的な宣伝をするために、SNSなどを活用してユーザーに楽しんでもらう工夫をしているそうだ。イン

タビューからは、作り手自身がカプセルトイに愛着を持ち、こだわりを持って商品を開発していることが伝わってくる。このような作り手の姿勢が、今も多くの人からカプセルトイが愛され続けている理由のように思える。

カプセルトイは数百円で気軽に手に入れられる小さなおもちゃである。それゆえあまり深く注目することがないかもしれない。しかし、本書を読めば、副題に「パカッとあけたら「あら、不思議！」とあるとおり、カプセルトイの魅力に改めて気づかされる、そんな一冊である。

(小竹毅郎)

注 「ガチャガチャ」はバンダイの登録商標です。

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

開館70周年記念展示「本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—」の電子展示会を公開しました

国立国会図書館は、平成30年10月から12月に開館70周年記念展示「本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—」を公開しました。

このたび、この展示会の記録として、出展した資料の大半を、国立国会図書館デジタルコレクションや拡大画像でご覧いただける電子展示会を公開しました。インターネット上でも展示会をどうぞお楽しみください。



開館70周年記念展示「本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—」
<http://www.ndl.go.jp/exhibit70/>



Les liliacées
 par P.J. Redouté Chez l'auteur,
 Impr. de Didot jeune 1802-1816
 【WB32-2(44)】
 v.2 103 Liliium superbum
 リリウム・スペルブム (ユリ科)



「モージャー氏撮影写真資料」
 Robert V. Mosier (撮影) 昭和21-22
 (1946-1947) 年
 「参謀本部焼け跡」※現在は憲政記念館

国際子ども図書館展示会「詩と伝説の国—イランの子どもの本—」

国際子ども図書館では、今年が日本・イラン外交関係樹立90周年にあたることを記念して、3月5日(火)から7月21日(日)まで、展示会「詩と伝説の国—イランの子どもの本—」を開催します。この展示会では、イランの子どもの本を、「詩と伝説の国イラン」、「イランの児童書の現在」、「画家・作家紹介」の3部構成で展示します。イランの文化に深く根付いている詩や伝説を題材とした作品、国際的に高い評価を得ているイランの画家・作家の作品などを紹介します。

○開催期間 前期：3月5日(火)～5月19日(日)
 後期：5月21日(火)～7月21日(日)

※前期と後期で展示内容が入れ替わります。

※月曜日、国民の祝日・休日(5月5日のこどもの日は開館)、毎月第3水曜日(資料整理休館日)は休館

○開催時間 9時30分～17時

○会場 国際子ども図書館レンガ棟3階本のミュージアム

○問合せ先 国際子ども図書館資料情報課 展示係
 電話 03(3827)2053(代表)

新刊案内

レファレンス 816号

平成31年の年頭のご挨拶

旧優生保護法の歴史と問題―強制不妊手術問題を中

心として―

アイルランドにおける憲法改正の手續と事例

官民ファンドの動向と課題

米空軍機の国外における飛行の規制(資料)



A4 90頁 月刊 1,000円 (税別)
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

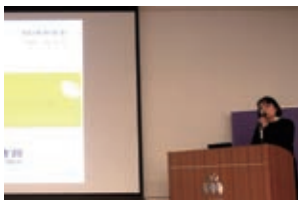
電話 03(35523)0812

平成30年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「震災の記録を伝える〜自然災害と防災教育」を開催しました

平成31年1月11日、東北大学災害科学国際研究所多目的ホールにて、東日本大震災アーカイブシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所との共催により、毎年1月に開催しているものです。

今年度は、最初に、平成30年に発生した大阪府北部の地震、北海道胆振東部地震の被災状況や震災記録収集等について緊急報告がされました。その後、「震災アーカイブと防災学習」に焦点を当てた事例報告が続ぎ、国立国会図書館からは、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)の取組について報告を行いました。

続くパネルディスカッションでは、震災の記録を伝えること、防災学習等に震災アーカイブを活用することの重要性と課題について議論しました。震災アーカイブに今後期待されることについて、参加者を変えた活発な意見交換が行われ、震災記録を収集し、伝えることの必要性を改めて確認する機会となりました。



国立国会図書館からの報告



パネルディスカッション

シンポジウムの詳細は以下に掲載しています。
<http://kn.ndl.go.jp/static/events>

おもな人事

〈異動〉※()内は前職

平成31年1月1日付け

専門調査員 調査及び立法考査局長(専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任)

山田 敏之

専門調査員 調査及び立法考査局政治議会調査室主任(専門調査員 調査及び立法考査局局長)

大曲 薫

専門調査員 調査及び立法考査局総合調査室主任(衆議院常任委員会専門員 国土交通委員会専門員)

山崎 治

専門調査員 調査及び立法考査局憲法調査室主任(専門調査員 調査及び立法考査局憲法調査室主任、政治議会調査室主任兼務)

山田 邦夫



11 東京本館のステンドグラス
(2013年2月)
photo by Mizuho

展示会

詩と伝説の国

入場
無料

イランの 子どもの本

The Land of Poetry
and Legends:
Children's Books
in Iran



2019年

前期 | 3月5日(火) ~ 5月19日(日)

後期 | 5月21日(火) ~ 7月21日(日)

【会場】国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム

【開館時間】9時30分 ~ 17時 【休館日】月曜日、国民の祝日・休日(5月5日のこどもの日は除く)及び毎月第3水曜日(資料整理休館日)

左『ちいさな黒いさかな』 サマド・ベヘランギー さく ファルシード・メスガーリエ かかわゆうこ やく ほるぷ出版 1984

右『ひとりぼっちのカメ アスガルとレイラ』 モスタファー・ラフマーンドゥースト 原作 アリーレザー・ゴルドゥーズィヤーン 絵 つかさじゅん 文 グリーンキャット 2010



International Library of Children's Literature

国立国会図書館 国際子ども図書館

3

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2019.3

NO.695
MARCH
2019

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
An elegant black butterfly, a mysterious scorpion—*from Konchu zufu*—
- 70-Anniversary Commemorative Exhibition Lecture
- 04 Microcosms in a book—Let's look at a scrapbook from the Edo period—
Dr. Robert Campbell
- 08 What I Learned from Books, What the Streets Taught Me
Prof. Shoichi Inoue
- 13 The Personal Libraries of Well-Known People (1)
Verner W. Clapp Collection
- 18 Memories of Verner W. Clapp: An interview with Rebecca Roe
- 20 Strolling in the forest of books (20)
Japanese gardens that have disappeared from maps—*from the Ozawa collection*
- 28 <Tidbits of information on NDL>
Listening to the voice of experience
- 29 <Books not commercially available>
Gachagacha daikenkyu
- 30 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

平成31年3月号 (No.695)

平成31年3月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集責任者 三浦良文

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<http://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 1 9 . 3

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

国

国

書

人

六